

東アフリカ高地におけるアグロフォレストリーの 発達と在来知の関係

Development of Agroforestry Systems and Local knowledge in East African Highland

佐藤 靖明 (SATOHI Yasuaki)

本研究は、東アフリカ高地のバナナを基幹作物とする地域において、アグロフォレストリー(樹木とほかの作物が混植される集約的な土地利用形態)の発達と住民の知識がいかなる関係にあるのかを、苗木の配布・モニタリングをとおして明らかにすることを目的としている。平成24年度は研究対象地域での予備調査、住民に実験的に配布する苗木の樹種の選定、そして苗木の管理に関する準備作業をおこなった。

まず、東アフリカ・ウガンダ中部のバナナ栽培農村においてフィールドワークを実施した。以前おこなった予備調査の結果を参考にしながら、住民に聞き取り調査を実施し、人びとにとってバナナとの混植に良いとされる樹種、悪いとされる樹種、植物利用に関する知識を記述するとともに、実際におこなわれている混作における作物の組み合わせを把握した。

苗木に関しては、本研究をサポートするウガンダ側の研究者で森林生態を専門とするマケレレ大学 John Tabuti 教授と、配布する樹種やその調達・管理方法について話し合った。生態学的視点、混作への適合性ととともに、樹木の利用価値を含む広い観点から樹種を検討した。住民への聞き取り調査と実態調査の結果を踏まえるとともに、既存の類似研究、World Agroforestry Center のホームページ、ウガンダの樹木辞典も参考にして、約 10 の樹種を選定した。これらには、従来から広く植えられている *Ficus natalensis* 等のクワ科の樹木や、生態的に適合性の高いマメ科樹木、食用・販売用への利用価値の高い果樹を含む。

苗木を配布する前段階での管理については、Tabuti 氏の研究グループで使用している苗圃の一部を利用させてもらうことになった。次年度には、住民への配布を開始する予定である。